

## 英 語 教 育 対 談 (2)

ジェームズ・カーカップ VS アラン・ブース

訳 山 本 哲 也  
真 崎 良 幸

ブース：今日の参加者のほとんどの方が英語の先生でいらっしゃいますので、教室でどうやったら英詩が教えられるかということに興味をお持ちかもしれません。そういう方たちのために、まず日本の教育を話題にしたいと思います。もちろんカーカップさんも長年日本の大学で教えていらっしゃいます。最近、朝日イヴニングニュース紙上で日本の大学生のことを書かれていましたね。そこで学生を二つのグループに分けて、片方を「キリギリス」組、もう一方を「アリ」組といっておられましたが、まずこの説明からお願いします。

カーカップ：「キリギリスとアリ」の寓話はみなさんもお存知のように、フランスの作家ラ・フォンテーニュの有名な話です。主人公のキリギリスは夏中、歌って踊って遊ぶばかりで、仕事など全然やりません。一方、アリの方はいつも忙しそうに働いています。アリとキリギリスは正反対の性格を持っています。アリは寒い冬の備えに食料を蓄えようと毎日一所懸命働きます。この二匹の昆虫は人生の目的が全く違うのです。キリギリスはいつも歌って踊って遊びほうけるだけ。アリは真面目にコツコツと働くのです。やがて冬がやってくる。キリギリスは食べ物はなく、家も、拠りどころもなく、寒さのなかで凍え死ぬのを待つだけでした。そこで、キリギリスは後悔して、アリのところへ行行って、頼みます。「アリさん、どうかこの冬を越すために食べ物を恵んでください。もう死にそうです」アリはどんな返事をしたと思いますか。「あなたは夏中遊びほうけていたのでしょうか？ まだ遊びたりないのではありませんか」そう言ってアリは何も与えませんでした。これが「キリギリスとアリ」のお話です。

ブース：日本の大学にはギリギリよりもアリの方が多いいですか。

カーカップ：はい、もう圧倒的に多いようです。私のクラスにも七十名ぐらいの学生がいるのですが、その中で「アリ」といえるのはほんの二、三名で、他の学生は歌って、踊って、酒と女にうつつをぬかしているようです。

ブース：それじゃあ教師として不満がつるでしょう？

カーカップ：たしかにそのとおりです。しかし私は「ギリギリ」に味方したい気持です。彼らは人生を謳歌しているのですから。人生の謳歌それ自体はすばらしいものです。私も学生の頃はギリギリ組でした。酒と女と歌に明け暮れていたんです。どうしてかって。どうして大学時代に私がギリギリ組だったのか。まず、第一の理由は、今日の学生同様に、当時の私には明るい未来などなかったからです。戦時中ですべてが暗く絶望的でした。だから大学の学問なんてどうでもいいという気持になったのです。大学では勉強すべき教科がたくさんありました。私は言語学の勉強をしていました。私のとった外国語はフランス語とドイツ語です。イタリア語とスペイン語の勉強もしました。いろんな国のいろんな言語でたくさんの本を読まなくてはならなかったのです。教養科目は味気がなく、私が習った教授も輪をかけて退屈でした。私はそのとき「自分に興味のあるものを読むんだ」と心に決めました。大学が学生に要求するものでなく、自分が読みたい本を読むんだと。自分で自分のテキストを選び、いろんな外国語で何百冊となく読みました。近代文学の詩や戯曲も読みました。当時はこんなものは大学の科目の中に入っていませんでした。近代文学などは大学で勉強するようなものではないと考えられていたのです。試験の時には私は答案が書けませんでした。大学の教科書はほとんど読んでいなかったからです。大学の四年間は自己教育をしました。そういう意味では私はギリギリ組だったのです。腹いっぱい遊びました。同時に私はアリでもあったのです。自分なりに勉強し将来に備えていたからです。実際、私が当時読んだ本はあとになってたいへん役に立ちました。もし大学の科目だけを勉強していたならば今は何も残っていなかったでしょう。あんなものは味気ない研究書や古い小説や随筆ばかりで、当時は全然興味も持てなかったし、今でも何の役にも立っていま

せん。だから私はクラスに遊びほうける学生がいる時にはよくこう言います。「遊んでもいいから何か一つだけ熱中できるものを探すことです。毎日カラオケバーでガールフレンドと遊んでばかりいないで、一つでもいいから何か見つけてください。大学の授業は嫌でもいいから、日本の社会に出たときに待ちまえて冬のような厳しい生活を克服するためにも何か一つ人に自慢できるものを掴むことです」

ブース：そういうキリギリスをアリに変えること、それが教育の目的だと思いますか。それとも両者の存在を受け入れて教育していくべきでしょうか。

カーカップ：もちろん両者の存在を認めるべきです。日本の大学の世界にはいろんな「ムシ」がいるのですから。中には不快感を覚えるムシもいます。ゴキブリ教授やカブトムシ教授もいるくらいです。大学教育は生涯教育を目指すべきだと思います。その意味は文学や科学の現実面を忘れてはならないということです。形式的ないわゆる学問だけでは意味がありません。社会に巣立つためには人間について学ぶことが大切です。いろんな人とつき合って寛容の精神を養うことです。教育は書物だけではありません。自己と他人がいかに共存できるかということを学ぶことです。これはいちばんむずかしいことかもしれませんが。

ブース：ジェームズ、あなたは今、日本の教育のよい点を述べておられるようですが、朝日イヴニングニュースでの論調はもう少し厳しいように思えました。もう日本で英語を教えるのが嫌になったのではないかという感じがしました。日本の教育に対しても学生に対してもかなり厳しく批判されておられたようでした。特に今日の学生について「自己満足」ということを言っておられましたが、そのあたりをもう少し説明していただけませんか。

カーカップ：まず申しておきたいことは、私の厳しい社判は、善意以外に他意はないということです。いつも何かを批判するときに悪意をもってするのはありません。ただいい方にいってくれればと願うだけなのです。私が今日の学生は自己満足だと言ったのは（もちろん例外はあるのですが）、彼らは豊かさに溺れていると言いたかったのです。今はあらゆる豊かさが可能になってき

ました。私が初めて日本に来た時の学生と違って、今の学生は甘やかされている。何でも手に入るからでしょう。何でも手に入れば、人間はかえって欲求不満になるのです。もう一つ言えば、私の教える大学生は視野が狭いということもあげられます。物事の表面的なことは知っていても、彼らの価値基準を越えた世界の出来事には関心を示しません。狭い視野で満足しているのです。だから私は「自己満足」だと言ったのです。学生が心をもっと開いて、人生には別の世界もあるのだということを知ってほしいのです。今ではもうたくさんの学生がアメリカやヨーロッパやオーストラリアに数週間あるいは一年間留学できる時代になってきましたが、それだけで国際人の切符を手に入れたと考えているようです。多くの場合、もちろん例外はありますが、その経験というものは浅薄で表面的なものに終わっています。そしてその浅薄な経験に甘んじてしまって、冒険に挑んだり、視野を広げようとはしないようになってきました。

ブース：詩人は良き教師になるれるでしょうか。

カーカップ：ええ、良き教師といえる詩人もいると思います。英語で教師に関する諺があります。「能ある者は行ない、能なき者は教える」と。能ある者とは物が書ける人。創造できる人。冒険心のある人をいうのでしょうか。つまり何か積極的にやって造り出すことのできる人をいうのです。こういうことができない人が教師になるというわけです。もちろんこの諺は一般論にすぎません。というのは、私の知っている多くの先生は、積極的に創造力があるからです。しかし、詩人は、もしくは詩人でなくても詩に興味を持っている人なら授業の中で教えることがたくさんあると思います。詩はそれ自体、常に新しい発明と創造の連続であり、予期せぬものとの出会いだからです。詩人には文学を教えることもできます。たとえば私は詩やシェークスピアを教えるとき、文学の成り立ちや詩の誕生の過程を教えることができます。また、詩人が一つの単語をそこでどんな考えで使ったのか、なぜここでピリオドにしたのか、なぜコンマを使ったのかなど。こういうふうに詩人には学生に教えることがたくさんあります。もちろんこれも学生の方で聴く耳をもっていればの話ですが。

同時に、私は他の話題にもふれることができます。授業の中で音楽、演劇、

映画、歴史、地理など、さらにはいろんな地方で遭遇した文化について話をします。こういう事がらを私なりに誰にでもわかる易しいことばを使って説明します。これは詩人だからできることかもしれません。詩人はとても簡単な単語を使って全世界を表せるような、広い深い意味を表現できるのです。毎日の生活の中でことばと対峙していない人は、ことばでいろんな考えを表現することはできません。私は意識的に、易しいことばを使って、美しいリズムを持った表現を造り出そうとしています。芸術家なら最もすばらしい授業ができると思います。だからこそ私の大学の学生が耳を傾けてくれるのだと思います。私は限られた語いで易しいことばを使って教えています、その易しいことばに魔力を持たせることができます。だから学生にも簡単な単語で目を見はるようなすばらしい表現ができるように教えられるのだと思います。

**ブース：**たしかに詩人は教える気さえあれば、教えるものがたくさんあるでしょう。私は自分が教師失格だと思うのですが、それは他人の評価によって自分の出来、不出来を左右されたくないからです。私は内省的すぎるのかもしれませんが。詩人は詩を作る際に詩作に没頭しなければなりません、そのことは学生に教えることとは相反することではありませんか。つまり、学生の要求に応えること、これは良き教師がしなければならないことですが、このことと詩人が没頭して詩を作ることとのあいだに矛盾をお感じになることはありませんか。

**カーカップ：**私は言語という観点からみると、学生第一主義をとっています。日本の英語教育の一つの欠点は、能力別編成がなされていないことです。一つのクラスに四、五人は英語のできる学生がいます。これらの学生は私の言うことをすぐに理解できるし、質問にも躊躇なく答えてくれる。ところが、残りの九十パーセント以上の学生は英語の語彙も読書量も少なく、勉強が好きでなく、私の質問にも答えようとしません。こういうふうに、できる学生とできない学生が同じ教室にいと、教えるのはとても難しくなる。こんなに能力の離れている学生と一緒に同じ教室で教えることは下可能です。英語を本当に学びたいという学生がいる一方、他の学生達は私のつくりだしたいと思っている善

意の雰囲気壊してしまうのです。日本で教えていて一番困るのはこのことです。日本の英語教育は、能力別組編成をやらない限り決して向上しないと思います。能力別組編成をやればそれぞれの要求に応えることができるし、私も学生ひとりひとりに合った教え方ができます。しかし日本ではこういう編成をやっているという話をきかないのは残念なことだと思います。

ブース：教育の話は一応置きまして、詩人の役割という話題に移りたいのですが、詩人には、たとえばことばを守るといった社会的義務というものがあるのでしょうか。

カーカップ：ええ、詩人はことばに深い関心を持った人でなくてはなりません。なんといっても詩人にはことばが生命ですから。ことばは毎日のように変化している。新しいことばや表現が次々と生まれてきます。中には奇妙で、コッケイで、醜いものもあります。詩人はこの新しく生まれたことばをどう評価すべきか。たとえば、コンピューターのことばは莫大な数にのぼり、コンピューター専門の辞書までできているくらいです。また、詩人は、ことばの価値を引き下げ、誤解を招くようなひどい広告英語にどう対処していったらよいのか。実は、こういう現象は、ことばが生きている証拠みたいなものです。しかし、ことばには二とおりの変化のしかたがあります。新しいことばでも良いことばはありますが、一方では、ことばを引き下げ、死に追いやるようなことばもあるのです。私はこのことばの変化に関心を持つものです。詩を作るときでも、学生に教えるときでも、良い英語と悪い英語の違いをはっきりと教えます。この意味では、詩人には社会的な義務があるといえるでしょう。ところが、日本で英語を教える場合、焦点を変えて教えることになります。ことばの社会的な関わりという点では同じなのですが、日本の学生には、保存すべきことばの価値だけでなく、他人との話し方や聞きかた、本の読み方なども教えます。ことばにまつわるこれらの活動は、現代の文化と文明の生存のためにとても大切なものです。現代文明は、今や技術工学の発達や知的水準の低下やことばの破壊によって危機に瀕しています。これは現代において詩が生き残れない原因の一つではないでしょうか。詩はマスコミの強大な力の前では勝ち目はありませ

ん。詩はこれとは逆に、ことばを最高のレベルにまで引き上げるものでなければなりません。

ブース：詩人には社会に対して道徳的責任というものがあるのでしょうか。

カーカップ：私は道徳ということばが嫌いです。私は学生に道徳や倫理などは教えません。自分の偽りのない感情や意見を述べるだけです。自分の道徳観を人に押しつけるつもりはありません。私の道徳観は私のものであり、私はそれに忠実なだけです。たとえば、私は平和主義者ですが、戦時中、軍隊に入ること拒否しました。私はどんな戦争にも反対ですから。私は拒否をしたためにイギリスで六年間強制労働を強いられました。私は間違った戦争には加担したくありませんでした。すべての戦争は間違っています。これは私の信念です。この信念は私の詩の中の基盤にあるのです。しかし、この信念を他人に強要したくはありません。私はただ自分の信念を述べるだけで、それに他人が同意してくれればそれは嬉しいことですが、同意してもらえないからといってその人の考えを変えようなどとは思いません。

ブース：関連質問になりますが、昨日の講演の中で、詩人は全体主義国家には歓迎されないとおっしゃいましたね。その例として、東ヨーロッパの国々をあげられました。しかしご存知のようにソ連からアメリカに亡命したアレクサンダー・ソルジェニツィンは西洋全体の価値観を批判しています。チェコやハンガリーやソ連のような全体主義国家の価値観でなく、西洋全体の価値観が彼の作家としての存在を危うくするのだと言っています。政治的な全体主義国家は別にして、自由主義国家の中でもあなたが詩人として危機感を感じることがありますか。あなたは先程、イギリスを去ったのはイギリスに詩を受け入れる土壤がないからだ指摘されましたね。そうすると、いわゆる自由主義国家にも詩人を殺してしまう要素があるのでしょうか。

カーカップ：ええ、もちろんです。先程ポーランドやチェコのような東欧諸国をあげましたが、たとえば南アメリカにもひどい人権と自由の侵害がおこなわれています。イランのような国でも人権に対する抑圧が強く、私はこういうことに対して一人の人間として断固抗議するものです。西欧諸国をみると、イ

ギリスは徐々に全体主義の色彩が濃くなっています。英国的な方法でゆっくりと微妙に変化しています。しかしその変化ははっきりと見える。特にマーガレット・サッチャーが首相になってからひどくなりました。彼女は独裁者の素質を持った首相です。ちょうど教室で生徒の管理をしていじめるのが好きな先生によく似ています。こういう先生も首相も最低です。サッチャーが政権を執るようになってからイギリスの経済は落ち込み、失業者が四百万にものぼっています。この数は政府がだした数で、これ以外にも失業の登録をしていない人の数は数百万はあるはずです。イギリスでは日増しに圧迫感が強くなってきています。西欧のいわゆる自由主義国家でも政治家の思惑どおりに動かされ、国民の同意なしに核戦争がおこる可能性だってあるのです。だからこそ、イギリスでもアメリカ、オーストラリア、ドイツ、その他のヨーロッパの国々でも大規模な反核デモがおこなわれているのです。イギリスではここ二、三年、核ミサイルの導入阻止のために数千人の女性がグリーンハム・コモンアメリカ軍基地でキャンプをはっています。この核ミサイルはイギリス、ひいてはヨーロッパ全体の将来を危うくするものです。

このような反政府運動を独裁的な力で抑えようとする傾向が強まっているのです。技術革新のなかにも同じ傾向がみられます。こういう現象が戦争の前触れを示す様相を呈し、それが全体主義の世界へとつながっていくのです。ブースさんのご指摘のとおり、東欧社会主義諸国のみならず、自由主義国家までもが歩調を合わせて、暗い全体主義の世界に近づいているのです。もちろん国によって程度の差はあるのですが、その影響ははっきりと見てとれます。

ブース：そういう緊迫した状況の中であってこそ、詩人を含めた作家や芸術家が何かをやらなければならないのでしょうか。もちろんあなたが東欧社会主義諸国の例をあげられた理由はよくわかります。言論の自由を侵した世界の話がされていたのですから。こういう状況では、体制を批判した詩人は投獄されるか、強制労働あるいは死が待っていることでしょう。しかし自由主義国家において、ある程度の緊迫感はあるにせよ、まだ批判できる余地がある場合、詩人にはそうする義務があるのではないのでしょうか。



カーカップ：ええ、そうだと思います。私も核戦争や秘密情報員のスパイ活動や、人間を機械にかえてしまう技術革新についての詩を書いています。こんな詩がイギリスで出版されることは考えられません。それは積極的な検閲とまではいわないまでも「無視」という冷たい仕打ちなのです。抗議の詩を書くことはできても、雑誌に掲載されることもないし、本になることもありません。これはある意味では検閲といえます。「イギリス紳士風検閲」とでも申しませうか。「紳士風」というのは時として怖いものなんです。

ブース：詩人にとって日本の環境はどんなものでしょうか。講演の中で、イギリスでは詩が衰退の一途を辿っている一方、日本は詩人の天国だとおっしゃっていましたね。しかし、日本には詩人の活動の邪魔になるようなものは全くないのでしょうか。もちろん政治的な意味ではなく、一般の社会状況の中で詩人を脅かす要素はないのでしょうか。

カーカップ：日本ではあのマスコミの巨大な力が詩人の小さな声を押しつぶしています。店頭に並ぶあのおびただしいほどの数の新聞、雑誌。日本人のいう「軽い読み物」が氾濫しています。詩はむずかしい読み物ではありませんが、「軽い読み物」でもありません。芸術的、社会的あるいは道徳的意味を持つ読み物です。日本には安っぽい大衆向けの読み物が多すぎます。日本の詩人も、私と同じ気持だろうと思います。本物の詩を出版している本がどれほどあるのかわかりませんが、なかには本当に知的な読み物もあるのは確かです。

もう一つの文明破壊の元凶はテレビです。テレビは安っぽい最低の知性に訴えるだけで、こういったものが日本では詩人にとって敵だといわざるをえません。この状況はイギリスやアメリカなどと較べてもひどいといえます。

ブース：それでも日本では詩人は生き残れる、ということをおっしゃっていたのはなぜでしょう。ご存知のように日本人はテレビ中毒といわれるくらいに、テレビが日本人の中に深く根差しています。それでもなぜ詩は死滅しないのでしょうか。

カーカップ：ええ、まだ頑張っているのでしょうか。それに *coterie* 誌という小さな同人誌があって、二、三十人の詩人がこれに投稿して詩を守ろうとして

います。こういうふうになさな力ではあっても同志が団結してマスコミという怪物と戦っています。こういう方法でしか、今のところは低抗する術はないでしょう。しかし、こういった中で一人で詩を書き続けている人もいます。その人はどの派にも属さず、師匠もなく、ただひたすら詩を書いているのです。こういう詩人にとって、詩作を続けることはとてもむずかしいことでしょう。詩を書いて生計が立つ詩人は日本にはほとんどいないでしょうから。イギリスでも事情は変わりません。

ブース：講演の中で、政治は芸術とは無関係であり、さらには政治が介入すれば詩の終わりを意味するとおっしゃいましたね。しかし有名な詩人の中で政治に関与した人もいます。私は、東欧社会主義諸国で体制側に強く抗議をして戦っている詩人のことをいっているわけではありません。英文学の歴史を振り返ると三人の詩人が頭に浮かびます。一人はイェーツで、彼は政治をテーマにして詩を書いたばかりでなく、アイルランドの議員でもありました。ミルトンはオリバー・クロムウェルの秘書をしていましたね。もうひとりアンドリュー・マーベルですが、彼もハルの議員をしていました。こういう詩人は政治に手を染めたから詩人としての価値が下がるといえるのでしょうか。政治介入が詩を汚したといえるのでしょうか。

カーカップ：彼らは政治家としてどれほどの手腕があったのか疑問です。政治に関しては、日本の中曽根首相みたいな信念の定まらない風見鳥だったといえるでしょう。特にクロムウェルと王室との間に内紛のあった17世紀の頃の詩人はほとんどがそうです。ミルトン、マーベルそしてドライデンもそうです。彼らは、都合のいいように政治を利用していただけです。こういう人達は良き政治家とはいえないでしょう。イェーツは確かに議員もしましたが、政治家としての手腕はどうだったのでしょうか。彼は確かに愛国主義者でした。アイルランドの文化を育て、言語と文学を保護しました。そして、演劇、映画、詩歌、小説の中にアイルランドのテーマを持ち込んだのです。これは良い意味の愛国主義といえるでしょう。愛国主義は半面、悪い方向に進むこともあります、イェーツの場合は病める社会を再生させたという意味で、「良い」愛国主義で

した。彼やその他のアイルランドの政治家を通してアイルランド文学の精神が蘇りました。その意味ではイエーツは立派な政治家といえるでしょうが、彼は「政治家」らしく振る舞わなかった。一種の象徴的存在だったといえるでしょう。詩人でも政治的信念を持つことはできます。たとえば、私は平和主義者でもあり、社会主義者でもあります。私の曾祖父は社会主義者として知られているトマス・カーカップです。彼はイギリスでは初めて社会主義の歴史を書きました。彼の著書は、1920年頃、日本の社会主義者が圧迫を受けていた当時の社会主義運動に大きな影響を与えました。私の政治信念は平和と社会正義がすべての人に与えられることです。私は詩を通してこの信念を直接表現することはありません。詩は宣伝ではないのですから。私の書くすべてのものの背後に、この信念があるのです。私の思想や行動もこの信念に支えられています。つまり、これは私の血であり、肉であり、骨であり、体の一部なのです。私も戦争と平和の詩を書いたことがあります。それは宣伝用の詩ではありません。まず芸術品であり、第二には、読者に社会正義と平和への祈りを感じとってもらいたいと願って書いたものです。

ブース：イエーツの愛国主義をプラスの要因として捉えていらっしゃいましたね。また、昨日の講演の中で、芸術は普遍性を持つものだとおっしゃいましたが、このことに関連した質問をしたいと思います。ニューヨークで出版されているジャパン・ソサイアティー・ニューズレターという雑誌の中に山崎正和という日本の評論家書いた記事が載っていました。日本のデザインのモチーフを紹介したものでした。特に草や水のモチーフのことに触れていました。山崎氏によると、日本人は生まれながらにして、あるデザインを正しく理解する本能を備えている、その本能は日本に生まれた者だけに備わった特権だということです。私はこれを読んで不愉快でした。この種の論理に私は我慢できないのですが、この論理に従えば、山崎氏の言わんとされていることは、生まれたばかりの赤ん坊でも、日本人であれば、たとえば、友禅染のモチーフが理解できるというわけですね。彼の論点は、日本という伝統的な文化の中で育っていないと、こういうものを理解するのは不可能だということです。他にもこの種の論

理を振り回す日本人は数限りなくいます。私達はお互い日本に相当長く滞在していますので、よく「あなたはガイジンでしょう。ガイジンには日本の芸術はわかりっこない」と言う日本人に出くわしますね。こういう人たちが言うように、自国の文化を理解するのには、その国で生まれることがそんなに大切なのでしょうか。一体、芸術は普遍的なものなのでしょうか。それとも、本当にガイジンには日本の文化を理解する資格がないのでしょうか。

**カーカップ：**私は日本に来る前に翻訳で日本文学を読みました。日本の古典文学を仏訳や独訳で読んだのです。大学時代も教科書よりこういう本をたくさん読みました。日本の絵画にも興味を持っていましたので、多くの日本人画家の研究もやりました。他の多くの西洋人同様に、私もゴッホやその他の印象派を通して日本の版画の研究もやりました。紫式部や吉田兼好の本の翻訳を読んで日本の美の深さも知りました。絵画だけでなく彫刻の中には日本独特の繊細な美があります。また、当時は仏像にも興味がありました。だから今、現代の日本の芸術を見ても自然に理解することができます。ガイジンだから日本人の理解度には及ばないとは思いません。外国の芸術を十分に理解できる西洋人は珍しくありません。たとえば、ソ連にも行ったことがなく、ロシア語も知らないたくさんの人たちがロシア文学を翻訳で読んで正しく理解しています。ロシア語とソ連人は、ヨーロッパ人にとっては全く異質のものです。ちょうど日本人が他のアジア人と全く違うのと同じです。もう一つ例をあげれば、ピカソ。彼はアフリカの黒人芸術や彫刻の影響を受けました。こういうふうに外国の文化を本能的に理解することも芸術という世界共通語のなせる業であります。日本人でなければ日本の芸術は理解できないという人は、非常に懐疑心の強い人だといわざるをえません。日本の芸術を日本人だけで一人占めしようとしているのでしょうか。こういう態度は日本の文学界にもみられるものです。たとえば、日本の英文学の大学教授はミルトン、シェークスピア、ハディー、ロレンスなどの研究を一人占めしようとしています。私のような外国人をこういう研究会の中に立ち入らせようとしないのです。彼らの興味は日本人のためだけの英文学であり、決して世界の英文学ではないのです。私は日本の学界で何度となく

門前払いをくらったことがあります。

ブース：最近東京に来たアメリカの詩人トマス・フィッシュモンズの記事の中で、彼が日本の詩人と連歌を作った経験を語っていました。この日本の詩人とは大岡信です。そして二人の共著で本を作りました。トマスはアメリカと日本の詩の違いを語っていましたが、彼によると、アメリカの詩は実用的で役に立つものであれば受け入れられるが、日本では特に社会の役に立つ必要はないのだと述べていました。それが日本とアメリカの詩の根本的な違いだということです。カーカップ氏はこの点をどう思われますか。

カーカップ：私は、詩やその他の芸術を社会に役に立つかどうかという観点から評価するのは間違っていると思うのです。芸術はただの飾りものではありません。人生のすべての生命が凝縮されたもの、それが芸術です。日本の詩歌を読んだり、能を鑑賞したりすると、そこに日本の本質が完全な形をとって表現されています。そこには役に立つとか立たないといった問題は存在しません。だから日本の芸術が何かの役に立つ必要もないでしょう。しかし、ヨーロッパあるいはアメリカの詩を考えた場合、必ずしもそれらが役に立っているものだともいえません。たとえば、カール・サンドバーグのような人道主義、平和主義、社会主義の広い思想を持った詩人もたくさんいますが、彼らは決して実用的な詩人とはいえないのです。実用的な詩とは何か。それは、ソ連や中国が政治的な意図で作った宣伝のための詩でしょう。詩が実用的になるのはそんな時です。しかしそういう詩は芸術としての崇高なる目的を失ったものだといえるでしょう。出来映えも立派な本物の詩とはほど遠いものなのです。

ブース：オスカー・ワイルドは「すべての芸術は無益だ」と言いましたが、そういうものがトマスの頭の中にあっただのかもしれませんがね。彼が日本とアメリカを比較したのはアメリカ社会の詩の評価の仕方を批判したかったのかもしれませんが。アメリカ社会は有益な詩だけを受け入れるが、日本はそれを度外視して一つの芸術品としてとらえる、そこに違いを見出したのでしょうか。彼は個人的には日本人の感受性の鋭さのほうに共感をおぼえているようです。

カーカップ：アメリカの場合は唯物主義と関係があるのかもしれませんが。物

質的に豊かな詩人、つまり、たくさんの著書を出版している詩人とか、あるいは大学などで講演をして稼ぎのいい詩人がアメリカ流の役に立つ詩人というのでしょう。しかし日本ではそういった要素は詩や文学の価値基準にはなっていないようです。

ブース：昨日私たちがいろんな詩人の朗読をやっていた時にふと思ったんですが、日本では毎年、伝統的な日本の詩歌を奨励するために新年の歌会始が宮中で行なわれます。これに招待を受けた歌人は紋付き袴で正装し、天皇、皇后両陛下を前にして自作の歌の朗詠をきかされるのです。わたしはいつもその歌人が可哀相でならないのですが、カーカップさんはいかがでしょう。

カーカップ：ええ、ほんとうに可哀相です。詩というものは作者の声と切り離せないものです。昨日私はイェーツ、ワーズワースなどすでに亡くなった詩人の朗読をしましたが、あの時は、詩の一つ一つのことばやリズムに隠れた詩人の声を探しながら読みました。死んだ詩人にもちゃんと声があるのです。私は、自分の詩を他人が読むのを聞かなければならないことほど辛いことはないと思います。もちろん、自分の詩をうまく詠めない詩人もたしかにいます。たとえば、テニソンやロバート・フロストのレコードを聞くとわかるのですが、彼らは詩の本質を声に表すことの出来ない詩人です。私も読み方がうまいとはいえませんが、自分の詩は自分で読みたいと思います。今まで他人が私の詩を読んで満足したことは、ほとんどありません。一度だけ例外がありました。それはアイルランドの女優ショブハン・マッケンナがアビー劇場とラジオで朗読してくれたときでした。たぶん彼女はアイルランドの血を受け継いでいるので、私と共感するものがあつたのかもしれません。普通は役者に私の詩を読んでもらうのは嫌いです。それは私の詩を大袈裟に美しくみせようとするからです。これは間違った読み方です。私の詩はそんなことをしなくても、もともと美しいのですから。手を加えて美しくする必要などないのです。詩の本当の読み方は作った本人だけにしかわからないものです。だから宮中で自分の歌が他人に朗詠されるのを聞かねばならない詩人におおいに同情いたします。胸の中は怒りで煮えくり返っていることでしょう。

ブース：最後の質問になりますが、授業で英詩を教えようとされる日本の先生方に対して、何かアドバイスはありませんか。必ずしも文学の講座で英詩をいかに教えるかといった大袈裟なものではなく、文部省検定教科書の範囲内で普通の高校の先生が少なくとも週に一回は英詩を授業の中にとり入れたいと思っていらっしゃる場合、この先生に対するアドバイスをお願いします。

カーカップ：私は講演の中でも言いましたが、学生に英詩の話をするときには詩の具体性を強調します。つまり、詩を捉えるとき、たくさんのことばが集まった複雑なものとしてではなく、一つの肖像や絵画や花瓶を見るときのような捉えかたをしてほしいのです。また、音節を数えたり、行数を数えたり、頭韻のような簡単な詩の技法、あるいはイメージや色、型、象徴などの繰り返しを教えたりします。こういうふうに学生の目に見える物から入っていく方がいいと思います。もう一つ私が学生に奨励することは音読の奨励です。nursery rhymes のような英詩の本質に触れる短い詩を選んで読ませるのです。また、英語を書かせることも一つの手です。日本の学生に英語を書かせるなんて不可能ですよと言われるかもしれませんが、そうでもないのです。私は学生に最も短い詩、つまり一行詩を書きなさいと言います。先ず私が二、三の例を紹介します。こうすることによって、学生は長い英詩を書かなくちゃならないという恐怖感から解放されるのです。たった一行の詩を書けばよいのですからね。エッセイを書いたり、翻訳するよりも簡単なのです。あるテーマで想像力を働かせて、たった一行の英詩を書けばよいのです。教師の方は季節をテーマにしたり、もっと現代の若者に関心のあるコンピューターなどをテーマに選んでやるといいでしょう。選んだテーマについて何でもいいから一行だけ英語をかかせるのです。この方法に慣れればこんどは二行詩に移ることが出来ます。

私が教室でやるもう一つはこうです。学生に用紙を配ってこう言います。「今まで一行詩の練習をしてきましたが、今日はこれを少し応用してみましょう。まず先頭の人、用紙の一番上に一行詩を書いてください。書き終わったらその部分を見えないようにして隣の人にわたしてください。用紙をもらった人は前の人が書いた詩を見ないで、二行目に自分の一行詩を書くのです。書き

終わったらまた同じように隣の人にわたします」こうして全員書き終わったら一連の一行詩ができあがります。これは時としてすばらしい出来映えになることがあります。それはある種の霊の力によって個々の詩がうまく調和して新しい美を生み出すからです。お互いに調和したり反発したりして、一つの完成した詩としての新しい生を受けることになるのです。これはダダやシュール・リアリストの詩人が使った技法で、その結果として恐ろしいイメージを出したり、機知に富んだおかしなものや、とてつもなく奇妙なものまで生まれたりするのです。この種の技法によって霊界からの神秘的なメッセージが伝わってきます。私は日本の大学生にこの技法を試してみましたが、彼らがさりげなく即興的に作った詩にもかかわらず、そこには何か予言的なメッセージが伝わってくるのです。詩という普遍的なことばを通して霊界のメッセージが伝わってくるのでしょう。大学生の書いた英語は必ずしも正しい英語ではありませんが、それはたいした問題ではありません。大切なのは一行詩の中のイメージでありフィーリングなのです。先程連歌の話をしました。これはその連歌によく似ています。また一行詩を使って英語の連歌を作ることもできます。その場合は折り曲げないで順に学生が一行詩を書いていくのです。前の方を見てそのイメージを発展させ、一つの統一体をつくりあげるのです。私はこの一行詩を集めて本にしました。参考のために二、三の詩を紹介しましょう。このときのトピックは「木」でした。木とひとくちにいてもいろんな種類がありますね。英語を学ぶ学生にとって木や花、鳥、昆虫などの名前を覚えることは大変有意義なことです。この一行詩は柳についての詩です。小川の辺にはえる柳、これを英語で weeping willow (しだれ柳) といいます。まずこの単語を学生に教えて一行詩を書かせました。一人の女学生はこう書いていました。

The weeping willow is secretly laughing.

(しだれ柳、彼はひっそりと笑っているのだ)

また、男子学生が正月に書いた幻想的でおもしろい詩があります。



On New Year's morning the door handle dropped off.

(把手がはずれちまった, 新年の朝の扉)

I cut myself shaving on New Year's morning.

(元旦や髭をそらずに顔を切る)

また, あるとき自殺の話をしたあとで学生が次のような詩を作りました。

Suicides attach too much importance to dying.

(自殺, ああ死ぬること, それが問題だ)

詩の魂は, こういった一行詩を通して予期せぬすばらしい芸術品となって表れるのです。もっと上級のクラスでは, 一行ではなく二行ぐらいの詩を作らせることができます。その一例を私の「禅の冥想」という本からとります。この本は禅について書いた本ではありません。広島の提灯行列のような日本のいろいろな風物を詩を通して描いたものです。私はこの詩の中で一つの円を描いています。つまり, あるイメージで書き始めて最後にまた元のイメージに戻ってくるのです。こうすると具体性が強くなり学生にも理解しやすくなります。詩の題名は BROAD DAYLIGHT です。これは普通の西洋人の禅の見方とは全く違った観点から書いています。私には禅というものがわかりません。禅を通して「悟り」を啓くことができないのです。いつも「悟り」は私の前を通り過ぎて逃げていってしまうのです。だから私流の禅の捉え方で書いたのがこの詩です。

# BROAD DAYLIGHT

Out of all the world

take this forest.

Out of all the forest  
take this tree.

Out of all the tree  
take this branch.

Out of all the branch  
take this leaf.

And on this leaf  
that is like no other

observe this drop of rain  
that is like no other.

And in this single drop  
observe the reflection

of leaves and branches,  
of the entire tree,

of the forest,  
of all the world,

the light of stars  
in the light of day.

この種の円を描いた簡単な詩が学生には分り易いのだと思います。私はこういう手法で英詩だけではなく、講演の中でも申しました「世界に対する覚醒」を促し、さらに英語の表現力をつけることを教えます。決まり文句を使った英会話を教えるのではありません。簡単な単語で今までに使ったことのないような組み合わせを考えさせ、それを芸術の高みにまで昇華させるのです。これは現

代の日本の学生に特に必要な訓練だと思うのです。彼らが英会話の決まり文句から脱却しない限り何も生み出すことはできません。英詩は一つの解決策でしょう。その中で彼らは一種の解放感を味わい、想像以上に英語が書けることに気づくはずです。それはまさに彼らの魂が解き放たれたからなのです。